



イランでは内陸部に塩鉱山や塩湖（オルミーイエ湖が塩湖である）が多数存在しており、塩の希少性が中国に比べて格段に低い。王朝政府の専売制も成立していない以上、製塩業者の独自性も薄く、彼らに特化した信仰が成立する余地は無かったと思われる。

## 23-2. ゾロアスター教の規範性

スイーラーフとチャーバハールのゾロアスター教徒集団墓地 … では、仮に、海洋神や船乗りの守護神や漁業者の守護神があったとしても。それらは、少なくともサーサーン朝時代については、イラン高原内陸部から進出してくるゾロアスター教の圧倒的な存在感の下に成立していたと考えられる。ペルシア湾岸やオマーン湾岸に於けるゾロアスター教の存在証明としては、一般に2つの都市の墓地遺跡が挙げられる。

下記の地図に照らせば、第1は、ペルシア湾に面したスイーラーフの港に残るゾロアスター教徒の集団墓地、第2は、オマーン湾に面したチャーバハールの港に残るゾロアスター教徒の集団墓地である。この2つの集団墓地のコンセプトは同一で、1,200キロメートル近く離れた2つの都市に同形態の墓地が存在するのである。

それは、下記の写真①及び②に見られるように、岩盤を削り貫いて棺桶状に加工した無数のダフメ群である。本来はこの上に1つ1つ石蓋があった筈

だが、今は失われている。イラン高原のゾロアスター教徒の間では、暗黒の勢力に敗北して汚染された遺体や遺骨が、神聖な地水火風に触れないように、しばしばこのようなダフメ形式の墓所を造営する。中央アジアに残ったソグド系ゾロアスター教徒だとこれがオスアリ（骨壺）形式になるのだが、ペルシア湾岸とオマーン湾岸ではダフメ優先である。ここでは、筆者が実際に訪問したチャーバハールの例を挙げたが、スイーラーフについてはD. Whitehouse, “Excavations at Straf : Fifth Interim Report,” Iran 10 : 63-88, 1972.ご詳し。

研究者の間では、イランを代表する複数の港湾都市にこれだけのダフメが集中していると言うことは、要するにペルシア湾からオマーン湾で活躍していたゾロアスター教徒の船乗りが、水葬もできずに遺体を母港に持ち込んでここに埋葬したのだと解釈されている。ゾロアスター教の教義は、確実に船乗りにはそぐわない。揺れる船上で拝火儀礼を実践したら、ダウ船が炎上しかねず、星を見て船の位置を見定めるべき夜間は、アフレマンが支配する暗黒の時間とされる。どう考えてもゾロアスター教と船乗りの相性は宜しくないのだが、



チャーバハールのゾロアスター教徒集団墓地①



チャーバハールのゾロアスター教徒集団墓地②

それにも拘らず、スイーラーフとチャーバハールの船乗りたちがゾロアスター教の葬法にこれほど執着している事実は、内陸由来のゾロアスター教の規範性が、ペルシア湾岸・オマーン湾岸でもそれだけ強力だったと云うことである。



ペルシア湾の地図

ゾロアスター教中世ペルシア語に於ける「海洋」… そのような規範性を發揮したゾロアスター教の側では、海洋をどう捉えていたのだろうか。現存するゾロアスター教中世ペルシア語文献は、概ね9世紀頃にペルシア州のゾロアスター教神官団が編集したと考えられており、地理的観点からは彼らが海洋を知らなかったとは考えにくい。

単語レベルから検討すると、D. N. Mackenzie, *A Concise Pahlavi Dictionary*, 1971によれば、中世ペルシア語で海洋を示す語としては、

- ・ Daryāb / ダルヤーブ (近世ペルシア語でダルヤー)
- ・ Zrey / ズレーイ (表記上は ziyd。Mackenzieは zreh / ズレーフと転写するが、最近では zrey / ズレーイ)

の2つがある。

Paul Horn, *Grundriß der neupersischen Etymologie*, 1893 (reprint 1988)でこれを補うと、これらの語源は、古代東イラン語に属するアヴェスター語で zrayah、古代西イラン語に属する古代ペルシア語で drayah とされる。推定復元される古代イラン語の祖語は、言うまでもなく Irayas-で、2つの単語は起源を同じくする。このうち、古代ペルシア語 drayah から、中世ペルシア語の「Darya / ダルヤー」が形成された。これに偶々「水」を意味する ab が付加されて、「Daryāb / ダルヤーブ」になったとされる。「Zrey /

ズレーイ」の方は、アヴェスター語(或いは他の東イラン語)から派生した口語表現と理解されている。

いずれにせよ、ダルヤーブとズレーイの語源は同じなのだが、だとするとその原義は何だろうか? Hornによれば、現在のイラン南東部、アフガニスタン南部、パキスタン西部で話されているバルーチ語(イラン高原東部で話されているが言語的には西イラン語である)の zrih は「源」を表わし、darya は「流れ」を表わすとされる。如何にバルーチ語が保守的な言語とは言え、古代イラン語祖語の原義を留めている保証は無く、これはあくまで参考事例である。

ゾロアスター教中世ペルシア語文献に於ける「海洋」… 次に、ゾロアスター教中世ペルシア語文献『ブンダヒシュン』を検討しよう。本書は、古代ゾロアスター教の伝承にサーサーン朝時代の神官団が解説を加えて成立した文献である。本書のイラン版の第10章(インド版では第13章)が、「諸」海洋の性質について(Abar ziyōnih ī zrehān)に当たる。これを、Domenico Agostini and Samuel Thrope, *The Bundahishn: the Zoroastrian Book of Creation*, Oxford University Press, 2020を参考に、以下に訳してみよう。イタリック部分は『アヴェスター』に遡ると想定される箇所、それ以外はサーサーン朝時代のゾロアスター教神官団の解説である。

①デーン(ゾロアスター教)に曰く、「フラーフカルド海は南にあり、ハルボルズ山の隣で地上の1/3を覆う。②これは広大(フラーフ

カルド)で、1,000の湖の水を湛える」。或る者曰く、「アルドウィースール(水の女神)の泉」。別の者曰く、「湖の源泉」。

③全ての湖には源泉があり、そこから水が溢れて湖に注いでいる。④全ての湖と河川の源泉は広く長く、良馬に騎乗した男が40昼夜かかってその海を周回出来るほどで、1,800フラサング(=1フラサングを6キロメートルとして10,800キロメートル)ある。⑤これが、その水が、純粋さ、湿度、温かさに於いて、他の水を凌駕している理由である。毎日、その水はアルドウィースール(水の女神)の聖水瓶から、ハルボルズ山のある南に向かって流出し、そこには100,000の黄金の運河が造成されている。その水は、その自然な温かさと共に、これらの運河を通じてフルカルヤーの頂点に達する。その頂上には、湖がある。水はその湖に注ぎ、浄化される。それから、1,000人の男の深さにある別の運河を通じて還流する。その運河の広い黄金の支流は、フラーフカルド海の中にあるウスインダム山に通じている。そこから、一部分は湖を浄化すべく注ぎ、別の一部分は大地に湿気や雨水として降る。全ての創造物は、それから湿気と癒しを得る。これらの水は環境の乾燥に対抗する。

⑥こう言われている。「フルカルヤーの頂きの黄金の穿孔から、無垢のアルドウィースール(水の女神)が、1,000人の男の高さから注いでいる」。

⑦塩分を含む3つの大海がある。「ブリーデーグ、カムロード、

スヤウブン」である。⑧これらの中で、ブリーデーグが最も大きく、その河川は流れて潮がある。それは、フラーフカルド海の周辺を回り、

そこに接続している。⑨フラーフカルド海とブリーデーグの間には、「サドウェース」と呼ばれる入り江がある。サドウェース湖からは強風が吹いており、ブリーデーグ海からフラーフカルド海に侵入しようとする劣悪、塩味、不純を吹き返している。全ての純粋で輝かしいものは、フラーフカルド海とアルドウィースール(水の女神)の聖水瓶に赴き、全てはブリーデーグ海に帰る。⑩或る帯が、この湖を月と風に結び付けている。それは、月の満ち欠けと共に上昇したり下降したりしている、⑪或る帯が、サドウェース湖をデネブ星に結び付けている。この星は、大ウルサが北方を守っているように、海と南方を守っている。

⑫満干の潮汐について、或る者は、サドウェース湖に棲む2つの風が、月の前から恒常的に吹いていると云う。彼らは、一方を「呼気」、他方を「吸気」と呼ぶ。「呼気」が吹く時は満潮、「吸気」が吹く時は干潮である。⑬他の諸海では、月の満ち欠けはそれらに影響を及ぼさないので、満干の潮汐はない。

⑭カムロード海は北方にあり、タバリストアンを流れている。⑮スヤウブン海はローマにある。⑯より小規模な海の中では、第20番目がサゲスターンにあるカヤンサー海である。まずもって、そこには害虫、蛇、蛙などが居らず、その水は甘い。⑰他の小規模な海の水も甘い。

⑱塩の諸海洋の悪臭ゆえに、それらのハーサルを測るのは不可能である。少しづつ暖風が吹くことで、その悪臭と塩は枯渇している。復活に際して、それらは再び甘くなる。

以上が、サーサーン朝時代のゾロアスター教神官団の海洋に関する認識である。一応、別章として第14章「河川の性質について (Abar cīyōnīh ī rōdha)」と第15章「湖の性質について (Abar cīyōnīh <ī> wartha)」が立てられている以上、サーサーン朝期の神官団が海洋と河川、湖を区別できていたことは間違い無い。

**海洋神の不在** … イラン版『ブンダヒシュン』の記述を見れば、古代の『アヴェスター』に由来するイタリック部分が判断基準となつて、サーサーン朝時代の神官団の海洋解説が構成されているのが分かる。フラーフカルド海とは、『アヴェスター』のウォルカシヤ海のこと、雨の神ティシュタルが降らせた水分を、風の神がハルボルズ山の南方に吹き集めて出来た大海である。その中では、如何にもゾロアスター教らしく、ティシュタルと旱魃の悪魔パーシュが争っているとされる。いずれにせよ、古代イラン人が想定した神話的な海である。

しかし、このイラン版『ブンダヒシュン』を読む限り、海洋を象徴するギリシア神話のポセイドンやローマ神話のネプチューンのような神格は、ゾロアスター教では生み出されなかったようである。ネプチューンは、語源的にはゾロアスター教のアバンム・ナパートと同一とされる(ネプチューンとナパートが同語源である)。しかし、アバンム・ナパートに捧げられたゾロアスター教賛歌「ヤシュト」書は存在せず、ゾロアスター教に於いてネプチューンの対応神格は周知の存在に留まった。これは、海洋に隣接したペルシア州に本拠を遷した後も、ゾロアスター教神官団がかなり保守的で、

- ・ ペルシア湾…251,000平方キロメートル
- ・ カスピ海…371,000平方キロメートル
- ・ 黒海…436,400平方キロメートル

であるから、事実とは異なる。尤も、「劣悪、塩味、不純」などと表現されているから、必ずしもプラスの意味で評価されているわけではないようだが。それにしても、オマーン湾やインド洋よりも、敢えてペルシア湾が重視されているのは何故なのだろうか？

#### 23-4. サーサーン朝・ペルシア帝国にとつてのペルシア湾・オマーン湾

**鉱物資源の供給地** … 古代〜中世にかけてのペルシア湾からインド洋の国際貿易を扱った研究としては、日本語で家島彦一、『海が創る文明——インド洋海域世界の歴史』、朝日新聞社、1993年『インド洋海域世界の歴史…人の移動と交流のクロスロード』と改題して、2021年にちくま学芸文庫で再版)と、『海域から見た歴史…インド洋と地中海世界を結ぶ

目の前にある海洋を神学に反映させようとはしなかったことを意味する。

**具体的地名の比定** … サーサーン朝時代の神官団が書き加えたブーイー・ディーグ海、カムロード海、スヤウブン海、サドウェース湖に関しては、特定可能である。その名もダルヤーイーと云う著者が書いた Touraj Daryae, “The Sasanian ‘Mare Nostrum’: The Persian Gulf,” *International Journal of the Society of Iranian Archaeologist*, Vol. 2, No. 3, 2016, pp. 40-48”つまり「サーサーン朝の『我らの海』…ペルシア湾」という対岸アラブ諸国から抗議を受けそうな題名の論文によれば、

- ・ ブーイー・ディーグ海 ≡ ペルシア湾
  - ・ カムロード海 ≡ カスピ海
  - ・ スヤウブン海 ≡ 黒海
  - ・ サドウェース湖 ≡ オマーン湾
- と特定されている。また、これらに付随して、完全な後付けであろうが、
- ・ フラーフカルド海 ≡ インド洋
- とも比定されている。

サーサーン朝時代になると、ペルシア州のゾロアスター教神官団は、ホルムズ海峡の存在を無視してペルシア湾を独立した海洋と認識している点を除けば、概ね正確な地理感覚を持っていたようである。しかし、我々にとって

『交流史』名古屋大学出版会、2006年と云う名著がある。広大な視野からインド洋貿易を縦横に論じているので、筆者も大いに参考にさせて頂いた。而して、海洋交流研究の焦点をインド洋からペルシア湾・オマーン湾に絞ると、また違った問題が見えてくる。近年の研究成果によれば、ゾロアスター教神官団と表裏一体の関係にあったサーサーン朝政府にとつては、インド洋全体と云うよりはペルシア湾・オマーン湾が、経済的な最重要地域だったとされる。上述の Daryae 2016は、これをサーサーン朝貨幣史の観点から論じている。

彼によると、サーサーン朝政府は5世紀以降にペルシア州、ケルマーン州、スイースタン州でかなりの量の銀貨を鑄造している。銀貨にミント地が打刻してあるので、この事実は動かない。しかし、イラン高原南部のこれらの地域には、エスタフル以外に銀鉱山が存在しない。そして、エスタフル鉱山だけで、これだけの量の銀貨の原料を供給するのは無理とされる。すると、ペルシア州・スイースタン州で鑄造された銀貨の原材料は、どこから調達されたのか問題になる。

従来は、西方遠征の過程で略奪してきたのだろうと推測されていたが、ペルシア帝国とビザンティン帝国の戦争は一進一退の攻防戦であつて、サーサーン朝が一方的に鉱物資源を略奪できたとは考え難い。そこで Daryae 2016が指摘するのが、アラビア半島にあるナジユドのシャマム村(現在のサウジアラビア中央部)にある銀鉱山と銅鉱山である。歴史史料によれば、ここにはサーサーン朝時代に1,000人のゾロアスター教徒が居住し、2つ

の拝火神殿があったとされる。

筆者はサウジアラビアのナジド地方を訪れたことが無く、シャマーム鉱山がどの程度の規模だったのか確かめていない。しかし、サーサーン朝ペルシア帝国がペルシア湾に独自の海軍を浮かべていたことは史実なので、如何にしてそれが経済的に引き合うのかに関しては、疑問を感じていた。対岸アラビア半島の鉱物資源がその誘引だったとの説は、今のところは十分な資料的裏付けがあるわけではないものの、筆者には良い着眼点と感じられた。

**宗教的理由が先か、経済的理由が先か** … 筆者が Daryae 2016 を最後まで読んで不思議に思ったのは、「サーサーン朝はゾロアスター教神学上プーイーデーグ海とされた。ペルシア湾を制圧することに、宗教的意義を見出した。同時に、そこには鉱物資源上の理由もあり、ペルシア湾を制圧してみるとインド洋への道が開けた」と結論している部分である。これでは、「①ゾロアスター教神学上の理由でペルシア湾へ ↓ ②鉱物資源獲得の動機も加わる ↓ ③偶然インド洋も視野に入った」との因果関係と理解できる。

しかし、筆者としては、上述のように、海洋に関するゾロアスター教神学が全く未成熟である（そもそも海洋神がない）点からして、ゾロアスター教がイデオロギー的理由でサーサーン朝ペルシア帝国に海洋進出を促したとは思えない。話しは逆で、経済的理由によってサーサーン朝ペルシア帝国が対岸アラビア半島に大々的に進出してしまい、ゾロアスター教神官団は

それを後追いついて、とりあえずインド洋をフリーフォルド海に比定したりして神学上の辻褄を合わせていたのではなからうか。

**二次的な航海神** … こちらの観点に立つならば、研究上はどのような方法論が可能だろうか。筆者としては、ゾロアスター教に於ける海洋神（どのみち居ないが）よりも、ペルシア湾・オマーン湾の海洋民が祀った二次的な神格に注目するべきだと思う。例えば、奇妙な逆転現象なのだが、日本の宗教民俗学では、海洋民は「わだつみ」を祀るよりも、沿岸航海を専門としていた関係上、航海の目印になる山を祀ったとされる。最も有名なのは大山津見神（大山祇神）で、これを祭る神社は、西日本では愛媛県今治市大三島の大山祇神社、東日本では静岡県三島市の三嶋大社とされる。海の民と所縁の深い土地には、これらの神社が聳えている。他方、外洋航海を専門とする海の民の間では、航海の目印は星しかない。彼らが拠点とする港では星辰の神が祀られるのだが、残念ながら日本ではその実例は無い。

このように、海の民が航海の目印を祀ると云う意味での航海神であれば、大宗教がイデオロギー上の必要から生み出す海洋神とは別個に、或る程度普遍的に存在する。そして、上掲の家島 2006 年は、インド洋に於けるヒドウルやエマーム・ザーデの存在を指摘している。これは、イスラーム期以降の海洋民の聖人（神格とは呼べない）崇拜だが、そのよって来る故事来歴が、一次的な海洋神なのか、二次的な航海神なのかは、まだまだ検討の余地があるように思われる。そして、海洋民自体はサーサーン朝時代から存在していたのだから、インド洋のヒドウルやエマーム・ザーデの何割かは、

イラン文化に由来する可能性はある。今回は、ペルシア湾・オマーン湾における二次的な航海神の存在を論じ、この観点からゾロアスター教と海洋の関係性を解明したい。

#### 参考文献

Touraj Daryae, *Shahrestaniha-i Eranshahr: a Middle Persian Text on Late Antique Geography, Epic, and History with English and Persian Translations and Commentary*, Mazda Publishers, 2002



現代のチャーバハールの造船風景（2004年12月筆者撮影）



あおき・たけし  
1972(昭和47)年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士(文学)。現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教史』(刀水書房)、『マニ教』(講談社選書メチエ)、『古代オリエントの宗教』(講談社現代新書)など著書多数。